

# 『南回帰線』の執筆開始をめぐって—— ヘンリー・ミラー論

本田 康典

## (1) 一九三二年八月から十月にかけて

『南回帰線』の末尾に「一九三八年九月、パリ、ヴィラ・スーラ」と脱稿の年月が記載されている。脱稿された年月の記載の有無が『北回帰線』や「薔薇色の十字架刑」という総題をもつ自伝的三部作と異なっている。一九二七年五月に作成された電文体の覚え書きの一部に依拠する作品としての『南回帰線』を書き上げると、ひとしお深い感懐がこみあげて、作者は脱稿の年月を示したのであろう。それでは『南回帰線』はいつ書き始められたのか。

『南回帰線』という題名は一九三二年七月に決定された。同年十月中旬、ヘンリー・ミラーはパリ在住の著作権代理人ウィリアム・ブラッドリーを介してオベリスタ・プレス（社主ジャック・カハーン）と『北回帰線』の出版について契約を結ぶことができた。ウィリアム・ブラッドリーは文学作品の目利きであり、彼の顧客にはエズラ・パウンド、キャサリン・アン・ポーター、ジョン・ドス・パソス、サミュエル・パトナム（『北回帰線』のマーローのモデル）などがいた。ブラッドリーが同年八月初旬に手にした『北回帰線』の初稿は現在の『北回帰線』のおよそ三倍の分量がある粗削りのタイプ稿であり、彼は「作者不詳」とされている初稿をカハーンに送った。『北回帰線』の初稿は八月にいったんミラーの手元から離れたのである。

はやる気持ちを抑えきれないミラーは、八月から『南回帰線』を書き進めていたようである。同年十月五日に旧友エミール・シュネロック（『南回帰線』のアルリックのモデル）に宛てた書簡で、「きみはパリのブラッドリーとかいう人物から、ぼくの最近の作品——『南回帰線』——の最初の六十ページほどの原稿を受け取ることになるでしょう」と通知し、さらに同月二十三日の書簡に「『南回帰線』は『北回帰線』より出来ばえがよいと思いますか、それともひどいと思いますか」とミラーは書き込んだ。

同年十月中旬、ミラーの妻ジューン・スマスがパリに到着し、アナイス・ニンよりも先に『北回帰線』の出版に関する契約が成立したのを知った。アナイス・ニンと親密になっていたミラーは、ジューンの突如の登場で狼狽し、うろたえた。十二月月上旬になると、死期が迫ったと感じたミラーは、『北回帰線』の将来の印税の配分を記した遺言書を作成し、アナイス・ニンに託した。ジューンは「さっさと離婚したらどうなの？」というメモを残し、年末に帰国した。アルフレッド・ペルレス（『北

回帰線』のカールのモデル)が彼女を見送った。

このような危機的状況ではジューンとの運命的出会いを軸とする『南回帰線』の執筆が順調に進捗するはずもなかった。伝記作家ジェイ・マーティンのヘンリー・ミラー伝によれば、「一九三二年十月上旬までにヘンリーは一四六ページの『南回帰線』を書き上げた。しかし、ジューンが到着すると、わずか十三ページしか書き進められなかった」ことになる。さらに伝記にはジューンが悪態をつき、怒り狂う様子が描かれていて、この時期の『南回帰線』の執筆が失敗に終わったと推察できる。要するに、ミラーは一五九ページまで書き進んだが、『南回帰線』の初稿と自負できるものを残せなかったのである。

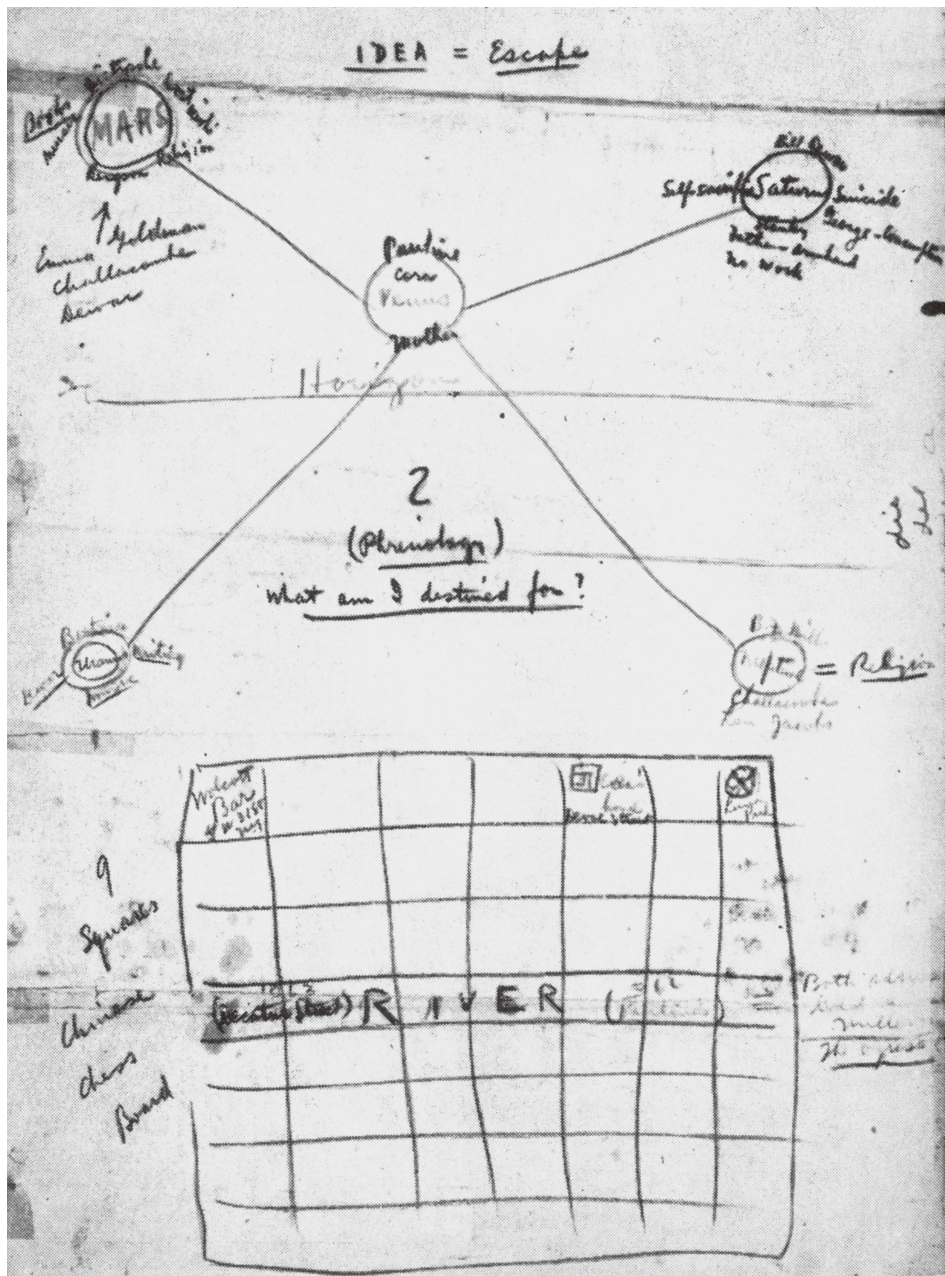
## (2) 一九三三年から一九三四年にかけて

『ヘンリー・ミラー雑録』(一九四五)という四十一ページの小冊子がある。印刷部数が五百部の限定版である。パリ時代の備忘録や雑文の寄せ集めのような構成になっていて、エミール・シュネロック宛ての手紙一通も載っている。興味深く思われるのは、一九三二年から三三年にかけて作成された「仕事のスケジュール」の列挙である。「大プログラム」および「小プログラム」と多彩なプログラムに分類されていて、「大プログラム」には十二の項目があり、十番目の項目が「ロレンスについての本を仕上げよ」であり、最後の十二番目が「『南回帰線』の新しいプランを作成せよ」である。一九三三年、ミラーは「『南回帰線』の新しいプランを作成」しつつ、ロレンス論の執筆と『北回帰線』の改稿に熱中することになった。

UCLAの図書館に『パリ ノートブック』と題する三冊のノート(コピー)が収蔵されている。『北回帰線』や『南回帰線』に関連する書き込みが目立ち、エミール・シュネロックに送ったと推定される『南回帰線』の草稿の一部も含まれている。感情の昂ぶりが激しく、冷静さを失っている内容なので、一九三二年の失敗に終わった草稿の一部ではないかと推察される。

『パリ ノートブック』とともに一枚の大判の紙が保管されている。鋏による穴らしきものを確認できるので、大判の紙は壁に鋏でとめられていたチャートであったと推測される。表裏にびっしりと書き込みがあり、おもてには「キャプリコーン・プラン」(Capricorn Plan)とされているので、ミラーのいう「『南回帰線』の新しいプラン」であると推断される。裏面には赤、黒、青のインクでミラーに重大な関係があった男女の名前と火星や土星などの惑星の名称が書き込まれていて、ほぼ中央に「ほくはどのように運命づけられているのか?」という一文がみられる。この問いかけが『南回帰線』の主題のひとつであるとすれば、現在の『南回帰線』の以下の一節がミラー自身の応答であり主張であったと思われる。

占星術を信じるとすれば、ほくは完全に土星の支配下にあると思わざるをえない。ほくの身に起こった出来事といえば、すべて遅きに失し、ほくにとってたいして意味をもたなかった。そもそも誕生日にしてからがそうなのだ。クリスマスに生まれるはずだったのが、三十分も遅れて生まれてしまった。



「キャプリコーン・プラン」の裏面 (UCLA 図書館所蔵)

しかしながら、ミラーが「キャプリコーン・プラン」に多くを依拠しつつ『南回帰線』を書き進めていたと断言することはできない。チャートのおもてに「登場人物」として六十三名の名前が列挙されているが、ミラーが勤務したウェスタン・ユニオン電信会社の配達員の名前がすべて欠けているからである。『反キリスト者』、『人間の絆』、『ジャン・クリストフ』、『創造的進化』と続く三十九冊の「書物」の題名が列挙されている。『南回帰線』にベルグソンの『創造的進化』とニーチェの『反キリスト者』についての言及がみられる。「書物」のリストは『南回帰線』において言及す



べき作品の候補の一覧であったと思われる。興味深いことに、三十九冊のなかに Kokoro という書名がみられる。夏目漱石の『こころ』であろうか。フランス語版の『わが生涯の書物』(ガリマール社)の巻末には五千冊の読書目録が掲載されているが、夏目漱石の作品はみられない。「キャプリコーン・プラン」が作成されたころ、ミラーは漱石の作品を一読してみようと思ったのではあるまいか。なぜか？ 当時のミラーは D・H・ロレンス論の執筆に熱中し、ロレンスの追及する「聖霊」が心の構造を解明しようとする心理学者ユングの「自己」と一致するという結論に達しつつあったからである。しかし、読書目録には漱石の作品ではなく、紫式部の『源氏物語』が出てくる。

六十三名の「登場人物」のなかに Tomajiro Asai という日本人の名前が出てくる。この人物はミラーの自伝的作品群に登場していない。ミラーとどのような関係のある人物であったのか。アナイス・ニンに宛てた一九三三年七月の書簡に、「かつての友人にジョージ・スタイナーというのがいて、コンサートで歌う歌手だが、日曜日になると自宅に招いてくれて、そこでもうひとりの日本人のテノール歌手と顔をあわせたものだ」という文章が出てくる。ミラーが Tomajiro という「日本人のテノール歌手」を思い出したのは、おなじ書簡において、かつてジューンとブルックリンのレムスン・ストリートで暮らしていたことを思い起こし、アパートの部屋が清潔で「日本にいるような思い」であったと言及したことに触発されたからである。ともあれ、「キャプリコーン・プラン」が作成された時期は、「日本人のテノール歌手」についての言及との絡みからいえば、一九三三年七月前後になるだろう。

「キャプリコーン・プラン」には「登場人物」、「書物」のほかに「討論」、「文体」、「アイデア」という項目がある。「文体」では十四名の作家や思想家の名前が挙げられている。「ウォルコット・ホテルとデカター・ストリートにはサマセット・モーム」、「理想主義にはロマン・ロラン」となっていて、作家たちの文体を参考にする意図があったようにも思われる。二十四項目の「アイデア」が列記されている。「哲学と宗教に対する強迫観念」から始まり、「両親や親戚に対する嫌悪と軽蔑」、「コーラに関するロマンチズム」、「ポーリンとの年齢差の影響」、「読書への没頭」、「コーラを失うことのとてつもない惨めさ」等々と続いているが、雇用主任として勤務したウェスタン・ユニオン電信会社についての「アイデア」がすっぽりと欠落しているので現在の『南回帰線』との乖離があまりにも大きく、「キャプリコーン・プラン」に依拠しながら『南回帰線』を書き進むのは困難であったと推断される。ジェイ・マーティンは『いつも陽気に明るく ヘンリー・ミラーの生涯』の第十二章において、一九三三年のミラーの執筆活動の概況をまとめつつ、「念入りに作成されて壁に貼られたチャートは色あせ始めた」と述べている。実際のところ、当時のミラーが『南回帰線』を書き進めていることを示す資料は見当たらない。

一九九四年秋に『ヘンリー・ミラー：個人のアーカイヴ』と題する販売カタログが発行された。発行部数は千部であり、発行したのはヴァレンタイン・ミラー、トニー・ミラー、ロジャー・ジャクソン、ウィリアム・アシュリーの四名である。ミラーの子供たちを除く二名が編者である。販売カタログの内容は、タイプ稿、原稿、手紙、水彩画、写真、メモ、ノートブック、その他さまざまであり、購入を希望する図書館、好事家またはコレクターは編者に連絡する必要がある。

この販売カタログのなかに『南回帰線』についての記述がみられる。一七七ページのタイプ稿の

一枚目に『南回帰線』、初稿、廃棄、一九三四年クリシーにて起稿」とミラーの自筆で書き込まれているという。ミラーがクリシーのアナトール・フランス通り四番地のアパートマンに引っ越したのが一九三二年三月中旬であり、『北回帰線』が出版された三四年九月下旬にヴィラ・スーラに転居した。とすれば、ミラーは一七七ページのタイプ稿を同年一月から九月までのどこかで書き進めたことになるだろう。当時のミラーはロレンス論の執筆に熱中していたが、『北回帰線』の書き直しや削除でも奮闘し、六月にはアナイス・ニンと共同で序文を書き、七月には校正という作業に突入していた。

販売カタログの编者たちは、サンプルとして三ページを掲載し、「この出版されずに廃棄されたタイプ稿は、一九三九年にオベリスク・プレスから出版された版と劇的に異なっている」と解説している。「テキスト全体がモノログに近く、ミラーの声は穏やかであり、初期の作品の苦々しい思いが欠けている」という説明を読むと、一九三四年十二月に成立したミラーとジューンの離婚が思い起こされる。

この「廃棄」処分に終わった『南回帰線』において、ミラーの妻ジューンはヒルドレッドという名前で登場している。パリ渡航以前の習作時代に書かれた『クレージー・コック』（一九九一年、グローヴ・プレスから出版）においてもジューンはヒルドレッドという名前で登場している。『南回帰線』においてジューンという実名がマールラに変更されたのは、別途に指摘するように、脱稿間近の一九三八年八月ころであった。要するに、一九三四年に書き進められた『南回帰線』は現在のそれとは極端に異なり、「廃棄」処分にしたために、ミラーは改めて稿を起こさねばならなかったのである。

### (3) 一九三六年四月、画家ヒレア・ハイラー宛ての手紙——新たな創作メモ

『北回帰線』が出版される前後に、ミラーは短編「仕立て屋」に取り組んだ。『北回帰線』の初稿には「仕立て屋」に関連するエピソードが織り込まれているが、初稿が長大であるために切り離されて短編として独立させる方針を採ったことになる。「仕立て屋」の執筆を優先させたミラーは、この作品を短編集『黒い春』に組み込み、一九三六年四月にオベリスク・プレスは短編集のタイプ稿を印刷にまわした。ここでミラーはかねてより着手したいと念願していた『南回帰線』に思いをはせたようである。アナイス・ニンに宛てた同年四月の書簡のなかに、「ぼくが今しようと思っているのは、ジューンについての本にふたたび取り組むことです」とミラーはそっと書き込んだ。確認される限りにおいて、これが三二年、三四年に続く三度目の『南回帰線』の執筆を目指す宣言であった。

一九三六年四月、ミラーは画家ヒレア・ハイラーにも手紙を書き送った。当時のハイラーはハリウッドで暮らしていた。「ハリウッドについて多くを知りたい。きみの印象を手紙で知らせてくれるかな？ いつか乗船して、ニューオーリンズで下船し、ミシシッピ川をを遡り、地図のいたるところに出かけたい。途中でアメリカについての本を書いてみたい」という文面のあとにハリウッドを含む四十四の地名や人名が羅列されている。「忘れないうちに、これらの章題を書き留めるつも

りです」と綴り、さらに自転車旅行に出かけて旧友たちにも会いたいと述べている。この手紙では書名は明らかにされていないが、アメリカ紀行『冷暖房完備の悪夢』の構想が芽生えていたことを示している。ヒレア・ハイラーと親交を結んでいたミラーは、『冷暖房完備の悪夢』のなかに「ハイラーと彼の壁画」と題する章を繰り込んでいる。

この手紙において、ミラーはアメリカ紀行についての本のほかに別の作品に取り組む意欲を示している。以下に引く。

ぼくがいま書いている作品——『ジューン、あるいは南回帰線』は煮詰まっています。葛藤は終わった。そいつが噴出して来る。それは摩天楼になるだろう——エレベーターやタバコの売店はないが。ぼくは少なくとも数百年は持続する作品を書いている。巨大にして無茶苦茶な。これはぼくの最後の一発だ——どいつもこいつも、なにもかもめちゃくちゃにせよ！沈むか泳げだ、おまえたち。同じことだ。ありとあらゆる結びつき、つながりをぶっ壊す。ぼくはあるというモンスターになりたい。とにかく、書き続けよ。ハリウッドの内幕を知らせてくれ。

ミラーは『南回帰線』をすでに書き始めているような口ぶりであるが、新たな覚え書き、新たな「キャプリコーン・プラン」の作成を先行させていたはずである。注目すべきは、『冷暖房完備の悪夢』の構想の芽生えと『南回帰線』を執筆しようとする熱烈な意欲が同時にみられることである。二つの作品はどこかで通底しているように思われる。

後述するように、『南回帰線』の起稿は二ヶ月後の一九三六年六月であったが、ヒレア・ハイラーに宛てて手紙を書いているときのミラーは『南回帰線』を猛烈に執筆している気分になっていた。ミラーは重要な手紙のカーボン・コピーを保持し、それを創作メモとして活用したり、『北回帰線』ではほとんどそっくり手紙を取り込むこともあった。ハイラー宛ての手紙も覚え書きの役割をはたしている。

『南回帰線』には「巨大な建築物を、摩天楼をつくりだそうとしている」という一文が出てくる。手紙では「少なくとも数百年は持続する作品」になる見通しになっているが、『南回帰線』では「ほかの摩天楼が姿を消したあとも、間違いなく屹立しつづけるはずだ」となっていて、さらにアメリカが「消滅したときには姿を消す運命にあるのだ」と作者は述べている。ハイラー宛ての手紙をメモにしたミラーは、彼の「摩天楼」について『南回帰線』では以下のように書き継いでいる。

ぼくのつくっている摩天楼だが、そこらへんに転がっているアメリカふう摩天楼とは違い、特異なものだ。この摩天楼には、エレベーターもなく、飛び降り自殺にうってつけの七十三階の窓もない。登るのにウンザリしたら、お気の毒様と言うしかない。正面ロビーには、階の案内板もない。だれかを探しているなら、自分で見てまわるしかない。飲み物が欲しいなら、外に出て見つけるしかない。このビルには、ソーダファンテンも、タバコ売り場も、電話ボックスもない。よその摩天楼には、人の欲しがるものがちゃんとあるのだろうが、ここにはぼくの欲しいもの、ぼくの好きなものしかないのだ。

ミラーがアメリカ紀行を手がけようとしたきっかけは、フランスの作家ジョルジュ・デュアメル  
の『アメリカ 迫りくる脅威』（英語版、一九三〇）に触発されたからである。デュアメルは彼の  
アメリカ紀行において痛烈なアメリカ文明批判を展開しており、『北回帰線』に少なからぬ影響を  
およぼした。ミラーのアメリカに対する鋭い矛先は、『南回帰線』において際立っている。『冷暖房  
完備の悪夢』にもアメリカ批判や呪詛を見出せる。

しかし、ヒレア・ハイラー宛ての一九三六年四月の手紙において、アメリカ紀行の執筆を示唆す  
るくだりには、アメリカを再確認したいという気持ち、ひいてはアメリカとの和解を探ろうとする  
気配が感じられないだろうか。一九三五年にもミラーは一時帰国を実現し、ヒレア・ハイラーに手  
紙を書き、「実はぼくのいちばんやりたいことはミシシッピ州を見ることなんだよ！ モビールを  
ひと目見ること、車にゆられてサンアントニオに出かけたり、グランドキャニオンの川床で寝そべ  
ることだ。当分のあいだバービゾン・ホテルだ。ホテルなんぞどうにでもなれ」とアナイス・ニン  
を追いかけるかのようにマンハッタンに到来したミラーは、ニンが宿泊したホテルで手紙を書き、  
広大なアメリカ南部を訪れたい気持ちを打ち明けている。要するに、生国アメリカに対するミラー  
の態度には、肯定と否定の両面があり、しばしば徹底したアメリカ拒否の一面が強調されている。

対象に対する互いに矛盾する感情の表出は、『ジューン、あるいは南回帰線』についても当ては  
まるように思われる。語り手ミラーにとって、ジューンは永遠の女性、ファム・ファタールであり、  
愛と憎しみ、肯定と否定の対象であった。離婚から二年後にミラーは、アメリカとジューンにおけ  
る両面価値を思い知ると、『冷暖房完備の悪夢』と『南回帰線』の執筆に同時に取りかかりたいと思っ  
たのである。極論すれば、ジューンは肯定と否定の対象としてのアメリカに一致する。この極論に  
相当する箇所を『南回帰線』の「終楽章」から以下に引く。

彼女こそ翼と性欲をそなえて歩くアメリカだ。彼女こそソルベットであり、憎悪の対象であり、  
昇華物であり——それに塩酸、ニトログリセリン、アヘンチンキ、粉末状の縞瑪瑙を少しずつ  
加えたものだ。彼女には豊満さと華麗さがかねそなわり、よかれあしかれ、それがアメリカだ。  
両側に大洋が広がる大陸だ。ぼくは生まれてはじめて、この全大陸に思いきりぶん殴られた。  
眉間のあたりをガツンとやられた。

一九三六年四月、ミラーは『南回帰線』の新たな創作メモの作成に猛然と取り組んだはずである。  
ヒレア・ハイラー宛ての手紙から推察すれば、新たな覚え書きは、アメリカ紀行『冷暖房完備の悪  
夢』の覚え書きを包含している可能性を秘めている。

テキサス大学図書館に「キャプリコーン・ノート」(Capricorn Notes)と題する覚え書きが所蔵  
されている。構成は一九二七年五月に作成された二十三ページの覚え書きに新たな七ページのメモ  
を加えたものであって、合計三十ページを「キャプリコーン・ノート」と名付けたようである。ミ  
ラーは「キャプリコーン・プラン」から「キャプリコーン・ノート」へと転換させたことになる。

一九二七年の覚え書き作成の経緯は、『ネクサス』の第十一章において詳述されている。テキサ  
ス大学図書館の説明文によれば、この覚え書きは一九三二年または三年にバーサ・シュランク(『北

回帰線』のタニアのモデル)に贈られたが、ミラーは数部のコピーを作成したとされている。

「キャプリコーン・ノート」には「オリジナルの章区分」という項目があり、「ピカードィの薔薇」、「離婚手当」、「キャバレー」、「失敗者」、「もぐりの酒場」等々と章題が続いているが、これは『南回帰線』ではなく『セクスス』や『プレクスス』の内容に関連している。当初から書き込みたいことを一冊の作品に収めきれないと思っていたようである。「一風変わった配達員」という項目があり、ウェスタン・ユニオン電信会社の配達員の名前が羅列されている。数えてみると六十一名になる。その次に「『アメリカ、冷暖房完備の悪夢』の章」という項目が続き、「キャプリコーン・ノート」の一部として扱われている。この項目には五十四の地名、人名、アメリカの事象などが書き連なれていて、「デラウェア・ラッカワナ&ウェスタン社」という鉄道会社と「シーボード・エアライン社」というかつて活動していた鉄道会社の社名が出てくる。これらの社名は『冷暖房完備の悪夢』には現れず、「南回帰線」のなかで言及されている。二つの作品には相応になんらかの関係が成立し、『南回帰線』はアメリカ再確認の一周旅行を前提とする自伝的小説として意図されていたと思われる。登場人物の候補者の名前はおよそ二百名に達する。最後に四十九名の「ジューンの愛人たち」の名前が列挙されている。愛人たちのリストのなかに世界的に有名な彫刻家オシップ・ザッキン(『北回帰線』のボロフスキのモデル)や離婚後のジューンが再婚したストラッドフォード・コーベットの名前が出てくる。

#### (4) 一九三六年六月十一日に何があったのか？

ニューヨーク公立図書館に『南回帰線』のオリジナルのタイプ稿(カーボン・コピー)が収蔵されている。箱入りである。最初のページに「一九三六年六月起稿、一九三八年九月脱稿。ヴィラ・スーラ十八番地、パリ」とタイプされており、起稿の年月が明記されている。ミラーは四月に「キャプリコーン・ノート」の作成に着手し、六月から四二二ページにおよぶ『南回帰線』の執筆を開始したのである。

このタイプ稿は現在の『南回帰線』に近いものの、あちらこちらに削除を示すバツ印が目立ち、記述が異なる箇所もある。登場人物や固有名詞は実名で出てくるが、ペンで一挙に虚構の名前に変更されている。ジューンはマーラに、パーク・プレイスはサンセット・プレイスに変更されている。パーク・プレイスは西十四番街に位置する地下鉄の駅名であるが、パーク・プレイス三十三番地は雇用主任としてミラーが詰めていた電信会社の所在地である。指摘したように、このタイプ稿には現在の『南回帰線』と異なる箇所が見受けられる。とすれば、ミラーがゲラ刷りに手を入れて、推敲した可能性もあり、完璧なタイプ稿は存在しないことになるだろう。

アメリカ議会図書館に五十六枚の『南回帰線』のタイプ稿が収蔵されている。一枚目の余白に「きみのために、ハンティントン——『南回帰線』の書き直されたページ。ヘンリー 三九年六月五日」とペンで書き込まれている。六月、ミラーはまだパリに滞在していた。『南回帰線』の出版は一九三九年二月に予定されていたが、実際には同年五月十日にずれ込んだ。意気揚々のミラーはフランスのニースを離れてギリシアを目指すおよそ一ヶ月前に、彼と肉肉な関係にあるハンティント



ン・ケアンズに連絡をとり、『南回帰線』のタイプ稿の一部分を贈ったようである。当時のハンティントンが作品が猥褻か芸術かを判別する検閲官であったが、ミラーの支援者のひとりであり、ワシントンD・Cで暮らしていた。

一枚目の冒頭にはペンで「作品はここから始まる」と書き込みがあり、現在の『南回帰線』とおなじ書き出しの文章が続いているが、ここかしこでペンによる単語の入れ替えが目立つ。右肩のページを示す数字が二十六から一に変更されている。二十六ページの文章を作品の冒頭に移動させたことになる。ミラーは『南回帰線』のテキストをどこから書き始めるかについても苦慮していたようである。

ところが五十六枚のタイプ稿のうち一枚には「一九三六年六月十一日」と日付があり、右肩の数字が新たに一とするされ、次のページの右肩に二と書かれていて、以下三、四、五と新しい文章が続いている。ミラーが『南回帰線』の起稿された月日を「六月十一日」に定めているかのようにも思われる。この日に何があったのか？ 日付の入っている最初のページのほぼ全文を以下に引く。

「このようなことをいたしますのも」と『わが不幸の物語』の序言にピエール・アベラールは書き、「あなたの悲しみはわたしの悲しみとくらべていただくと、実のところ、あなたの悲しみがなきにひとしいか、あっても微々たるものであり、そうすれば、もっと安らかな気持ちで悲しみに耐えてもらえるのではないか、とおわかりいただくためなのです」と述べている。

つい最近になって、ぼくはアベラールの有名な自叙伝にでくわした。この作品はぼく自身の物語、いままで語るのが不可能であるように思われたぼくのかずかずの不幸の物語を書き始める勇気をあたえてくれた。このアベラールの自叙伝の序文において、ぼくをおなじように感動させる文章を、かくも深遠なまでに真実であり、悲しいまでにみごとに真実であるように思われる文章を偶然にも見つけた。というのも、「進化は世界の動植物を変容し、あるいは外形の姿を少し変化させるかもしれないが、ひとはつねに不変であり、数百年におよぶ歴史の展開といえども、ひとにいささかの影響もおよぼさない」。本質的にひとは不変である、つまり、神の前において。しかし、ひとは自分自身と自分のうちなる神を裏切ることができる。これこそひとが絶えずやっていることであり、地上における彼の運命が達成されるまでこの所業を継続するだろう。この見地においてのみ、ぼくはジューンとのわが生活の悲劇を理解できる。ぼくは彼女を、自分自身を、ぼくのうちなる神を裏切った。ぼくは果てしない地獄を独力で創り上げた。

アメリカ議会図書館に収蔵されているタイプ稿は、定稿となった『南回帰線』と同様にピエール・アベラールの『わが不幸の物語』の序言を『南回帰線』の冒頭にエピグラフとして掲げていることで共通している。ニューヨーク公立図書館に所蔵されている「オリジナルタイプ稿」では、『わが不幸の物語』の序言は地の文章として出てくるが、削除を示すバツ印が付されている。バツ印は『南

『南回帰線』の冒頭にエピグラフとして掲げることを意図したためであると推定される。とすれば、ミラーは「一九三六年六月十一日」にアベラールの『わが不幸の物語』の序言の扱いを変更したことになる。これは何を意味するのであろうか？

『南回帰線』の執筆が順調に進捗しなかったのは、この作品が「いままで語るのが不可能であると思われたばかりのかずかずの不幸の物語」であったからである。アベラールが序言において「あなたの悲しみはわたしの悲しみとくらべていただくと」、読者の悲しみが「微々たるもの」と説いていることにミラーは衝撃を受けたのではなかろうか。つまり、アベラールが自身の傷を切開することによって、読者の傷を閉じようとしていたからである。アベラールは自身の悲しみを語ることによって、他者を慰め、励まそうとする。ミラーは中世の神学者ピエール・アベラーからミラー自身の「かずかずの不幸の物語を書き始める勇気」を得たのであって、執筆についての個人的な動機を高いレベルの動機に繰り込むことによって、いっそう大胆に『南回帰線』を書き進むことができたのである。六月十一日は『南回帰線』の執筆に関して記念すべき一日であったのである。

#### 参考文献・資料

Bradley, William A. Letter to Henry Miller dated August 6, 1932. Humanities Research Center, University of Texas.

Jackson, Roger & Ashley Wm. E. *Henry Miller: A Personal Archive*. Sale Catalogue, 1994.

Martin, Jay. *Always Merry and Bright The Life of Henry Miller*. Santa Barbara: Capra Press, 1978.

Miller, Henry. Capricorn Plan. Research Library, UCLA.

———. Capricorn Notes. Humanities Research Center, University of Texas.

———. *Crazy Cock*. New York: Grove Press, 1991.

———. *Henry Miller Miscellanea*. Philadelphia: Walton Press, 1945.

———. *Les livres de ma vie*. Paris: Gallimard, 1957.

———. *Letters to Anaïs Nin*. London: Peter Owen, 1965.

———. *Letters to Emil*. New York: New Directions, 1989.

———. Letters to Hilaire Hyler. Research Library, UCLA.

———. *Nexus*. Paris: Obelisk Press, 1960.

———. *Stand Still Like the Hummingbird*. New York: New Directions, 1962.

———. *The Air Conditioned Nightmare*. New York: New Directions, 1945.

———. *Tropic of Capricorn*. 1939; rpt. New York: Grove Press, 1962.

———. *Tropic of Capricorn*, excised pages. Library of Congress.

———. *Tropic of Capricorn*. The Original Typescript, New York Public Library.

本田康典 『「北回帰線」物語』水声社、二〇一八年

『南回帰線』松田憲次郎 訳、水声社、二〇〇四年

『冷暖房完備の悪夢』金澤智 訳、水声社、二〇〇八年

付記 本稿は構想中の作品『南回帰線』物語』を構成する一章として意図されています。

# When did Henry Miller begin to write *Tropic of Capricorn*?

HONDA Yasunori

On the last page of *Tropic of Capricorn* the month and year of completing the tome is clarified. But the author does not denote the year he began to work on the novel.

Henry Miller composed the 23- page memorandum of the novel when his wife and her cohort left for Paris without notice in May, 1927. The memo is now housed at the Humanities Research Center, University of Texas.

In August,1932 Miller began to write *Tropic of Capricorn* after he handed the first draft of *Tropic of Cancer* to a literary agent in Paris. However, he wrote only the 159 pages of the book due to an emotional outburst when his wife abruptly appeared in Paris.

In 1933, Miller made a new memorandum titled 'Capricorn Plan', but was not able to proceed the project. In 1934, he wrote the 177 pages of the book, but it was quite different from what is now *Tropic of Capricorn*. This first draft was scrapped.

In April, 1936 he again made a new memorandum titled 'Capricorn Notes' and in June he started working on the tome. Eventually he wrote the 422 pages of *Tropic of Capricorn*, the typescript of which is housed at New York Public Library. Also excised pages of *Tropic of Capricorn* is deposited at Library of Congress. In one of the pages the date of beginning to newly write *Tropic of Capricorn* is denoted. Miller began to write the book on June 11th,1936.